

〔巻頭言〕

本学紀要への私見

機能看護学講座教授 上野 美智子

本誌の刊行は第7巻9冊目である。2005年度から年2回の発刊となり、いままでに発表された論文の総計は145編である。145編には教員の教育と研究にかけた情熱と成果が込められており、本学の知的財産として蓄積されていく。

紀要と関わった体験から、紀要に関する私見を述べてみたい。

筆者の場合、機能看護学教育と成熟期看護学教育（産業看護）に関わってきた。機能看護学は、開学から本学独自の考えに基づいて開発に取り組んでいる看護学であるため、講座の看護系全教員参加のもと、授業構築に着手し毎年その評価と改善の繰り返しが行われている。したがって、教育実践研究を積み上げていくことは必須であり、それを発表するのに相応しい場の一つは紀要である。

産業看護学教育では、看護師・保健師教育の指定規則に産業看護学が独立していないため、産業看護学教育を行っていない学校も多い。2002年の調査では、76.4%の看護大学が2～120時間の産業看護学教育を行っていた。大学における産業看護学教育のあり方について、先行研究は少ない。そのため、本学では学生が将来、臨床・地域・学校・産業の何れかで働くようになって、対象の労働生活を視野にいたした全人的看護が実践できることを目標に、授業構築を追究してきた。

昨年、岐阜で産業衛生学会東海地方会が開催された。地元での開催に協力するため、本学の産業看護学教育の構築を報告した。紀要に発表してあった4編を根拠にして報告することができた。“4編紀要に発表してあってよかった”というべきか、“もっと発表しておくべきだった”というべきか、何れにしても、ちょうどよい時期を逸すると書けなくなるものである。発表することは、教育の説明責任・結果

責任を果たすことになるが、多忙なスケジュールのなかで実行していくことは至難な今日この頃である。発表できなかった内容の方が多い。

紀要には査読があるが、査読をする側もされる側も精神的負荷がかかるものである。建設的な査読や専門分野の違う視点から筆者に欠けていたところを助言してもらえた場合は、査読によって研究者が成長し、エンパワメントされる。筆者がそのように査読ができていたかと振り返ると、反省することも多い。本学の査読を重視するシステムは、研究者・査読者・紀要委員会ともに大変であるが、このような機会に厳正で論理的な評価を受け、研究者としての資質を培っていく機会にすることは極めて重要である。

個人情報保護法施行により、研究の倫理的配慮は従来にも増して人権重視となり、ひとを対象とする看護ではより高いハードルが求められるようになるであろう。

紀要をとおして、本学における情報の共有が図られる意義も大きい。自らの教育・研究の見直しや新たな発想を得る機会にもなっていく。

発表論文は、その後自らの教育・研究の基盤になり、後で読み返しながらその後の舵取りをするために、紀要は手の届きやすいところに置いてある。

紀要の研究業績としての評価は其々あるが、大学の紀要に懸ける姿勢にもよると思う。本学が重視する教育実践研究や現地看護職との共同研究、看護実践研究指導事業などは、地に足をおろし、学生・現地看護職主体で一步一步研究が進んでいくものである。専門学会誌への投稿に至る過程で紀要が貢献する役割は大きい。